# おはなしは心の交流である

京都　平安女學院保育科　大塚喜一

同じ話材を通じて心の交流が一回毎に新しくしかも次第に深められて行く心の經驗は、幼稚園のおはなしに於て、更に切言すれば、「幼兒と語る」に際しての基調ともいふべき最も力强き生氣と滋味との源泉である。然らば斯かる心の經驗は一體どれ位斯道に精進すれば得られるであらうか？、この問に對する答は實際家諸賢の御經驗により色々あるであらうが、小生はこゝに現に小生が親しく共に學びつつある一女學生の新しき心の經驗を紹介する。この文は今迄「基本教育としてのおはなし」其他の拙稿を通じて本誌に發表して來た研究と實踐とを進むる上の好適の生きた資料たる事に心して讀んで頂きたいと思ふ。

✡

「子供は一度聽いたおはなしを何度も聽きたがるものだ」と教育の時間にお話下さいましたので、私、家に歸つて試驗するつもりで、或る夜小さい弟に孝女お露の話をしてやりましたのよ。寢床の中に入つて聞いてゐました弟は、さも感心した樣ににつこり笑つて、その夜は安らかに眠りました。そしてあくる夜、弟は寢床に入つてから「お姉ちやんおはなしして頂戴」て申しますの。それで私が、「もう姉ちやんは何もお話知らないわ、明日の夜までに何か面白い本を見といてあげるから、今夜はおとなしくお休みなさいね」て云ふと、弟はお目々をパチクリさせて「お姉ちやん、昨日とおんなしでよいのよ」て云ひますから、昨日と同じ孝女お露の話をしてやりました。弟はさも珍らしさうに終まで聞いて、「姉ちやん面白かつたよ、お露てえらい人ね、僕もお露よりももつと〳〵お父さんやお母さんに孝行するよ」つ

て云つて、その夜もにつこりほゝゑんで眠りました。それからは、おはなしをしてやらないと眠れない弟となつてしまひましたの。弟はごんなにおそくても私が寢床へ入るまで側できちんと座つて待つてゐます。「お姉ちやんはおそくなるから先にお休みなさい」。と云つても、決して先に寢床に入りません。先生、私お話てあまり知りませんので、毎夜毎夜孝女お露の話ばかりしてをりますの、これでもう同じ話を二十回程しましたわ、でも今だに嫌な顔もしないで前と同じ樣に、いゝえ前よりもより以上に樂しいさうに面白さうに聞いてゐますわ！、此頃ではもう弟の方が上手に云ふ位になりました、でもやはりお露の話をしてくれと云ひます。

大塚先生、子供て一體ごんな心で居るのでせうね、子供とはいへ同じ話を二十回も聞いてまだ飽きないなんて、一體子供の心てごんなのでせう。

先生、子供て可愛いゝものですのね。私、教育を習ふまでは、子供なんて本當にきらいでしたの、見るのも嫌でしたわ。だのにこの頃の私は全く反對です。子供が側に居なければ一日も暮せない私になつてしまひました。この頃弟妹を可愛がるので、お父樣やお母樣にほめられて頂いてゐます。……

✡

高女五年生の教育の時間として小生の受持つてゐるのは一組につき一週僅か一回(四十分)であるので、その限られた短時間内に必要なる中心的感銘を喚起し教育精神を育成すべく努力してゐる。それで、おはなしに就ては「基本教育としてのおはなし」(本誌第三十二卷第五號)の中に述べた「心の交流」の情景をわかり易いやうに話してその實例として「鈴木すみ子先生の體驗談」(本誌第三十一卷第十一號)を讀むか又は語るかするだけなので、小生としては甚だ物足りなくせめてもう少し時間があればと思つてゐる。然るにこゝに紹介した樣な**新しい**心の經驗を味ひつゝある事實が生徒諸姉の感想を通じて幾人も引續き披瀝されて來ること、それが僅か四十分位の拙話によつてのみ惹起せられたのだとはどうしても思はれない。實は幼兒と處女との互に相求めむとする心がその本然の性情として内在してゐたの

が「おはなし」といふ**新しい**心の經驗を通じて一體となつて結ばれ、そこに今までは見出し得なかつた**光**が新しく產み出されたのだと惟ふより外はない。現に小生自身さへ、この文を讀んで「これでもう同じ話を二十回もしましたわ……前よりもより以上に樂しさうに面白さうに聞いてゐますわ！」といふ所に來た時、涙ぐましい程の感激共鳴が新しく胸に迫るを感じた。又今この稿を書きつゝある時にも、やはり同じ心の動きが新しく感ぜられる。實にこは言葉の說明を以て盡し得ざる『おはなしの**神祕**』である。幼稚園の先生方よ、家庭のお母樣方よ、童心を友として生きんとする同志の諸兄姉よ、先づこの『おはなしの**神祕**』を體驗せられよ！、その體驗の伴侶たるべく言葉を用ふる事が許さるゝならば、この神祕は幼兒の**天眞の信賴性**に潛むのである。故に、幼兒と語る我々はこの天眞の信賴性に乘托して、表面幼兒に語るが如くにして實は話者の言葉も態度も心も念念に刻々に、圓いお目々をしておはなしに聽き入りつゝある幼兒の**童心に純化**されて行くのである。この信賴性に乘托し得るまでの『**純**』なる心にさへなれば、たとひ智識は少く經驗に乏しくとも、幼兒と親しき心の交流が味はれ、童心の光により自己が純化し更生し行く法悅境に參し得る事は、前に述べた事實が明かに物語つてゐるのである。

斯かる「童心の光による更生」を、その全我の體驗を以て如實に述べられたる顯著なる實例として、始めて幼兒達におはなしをした時の保育實習生の感想に就て次に記すことにする。一年生の二學期の中頃から一週に一時間位づゝ幼稚園を參觀してゐた保育科の生徒達は、三學期に一人づつ日を定めて十數人の幼兒達の前に出ておはなしをする事になつた。この初經驗の心の記錄として當時提出された感想は何れも次に述ぶる如き心を披瀝してゐた。何しろ「おはなし」としてするのはこれが始めてであり、その上實習指導の先生や大勢のお友達が側から見てゐられるので、子供に話す嬉しさや責任感と周圍の大人に對する恥かしさとが交錯して、前の晩は寢つきにくかつた位だつた。さていよ〳〵幼兒達の前に出て「この頃みなさんだん〳〵仲よしになりましたから、今日は一つおもしろいおはなしをしませうねえ」と挨拶の口を切つた。まあ、みんなよく聽いてゐるこ

と！今までこんなに多くの圓いお目々、林檎の樣な顏々に對しておはなしをした事が無かつた私は、子供達の可愛さに引かされて始めの恥かしかつた氣持も次第に薄らぎ、落ついて話を進めて行く事が出來た。……そして話し終つて子供達が拍手した時、ホッとして我に歸り自分の周圍に大人も居た事に始めて氣がついたのだつた。おはなしをしてゐる時はそれに氣づく餘地の無い程、そんなに熱心に子供達がよくこそ私の初經驗の話に耳を傾け心をこめて聽いてゐてくれたればこそ、下手ながらも始めてのおはなしを無事にすます事が出來たのだと思ふと、一層この子供達に對する親しみが增し、歸りがけに窗から「先生、又來ておはないしてやあ」と叫ぶ元氣な聲に、保姆としての私のこれからの人生がこの子供たちによりその門出を祝福された樣な心地がして、嬉しさと感謝の心で一ぱいになる……

といふ樣な心もちを、多少その人の個性により文のあやに違ひがあるが、大體右の樣な心境の告白である事は云ひ合した樣に、否最も自然にして必然なる**心の眞理**として皆が一致してゐる。この感想文に一々祝福の言葉を書き添へて返した時、小生は眞に心から「**お芽出度う**」と云つた。この新しい心の經驗により、彼女達が未知の世界に一歩を踏入れ、前途に大きな希望の光を今見出し得た事が明かに讀まれたからである。幼兒に對する感謝の念！これこそは嘗て本誌第三十卷第二號に「おはなしについての反省」と題して記した如く、小生が十年にして漸く到達した心境である。然るに今、名實共に**處女經驗**を以て小生のこの心に一致する體驗を獲得せられたる多くの親しき友の告白を聽いて實に感慨無量である。松美先生は「おはないしに於ては私達はいつも初心者である」と云はれたが、この初心者の心境こそは、常に新しき謙虛なる心を以て幼兒の前に出で幼兒と偕に語るべき地位に居る我等の態度たるべきである。

（昭和九年一月十日　新春心新なる日に）

（六三頁より）

の盜棒をつかまへるお手傳や、お助けをしたり、いくさの時に敵の居る處をかぎだしたりして大變賢い役目をする者だと教へられまして大そう感心しました。（をはり）